

旅の草子そうし

池庭の謎

— 笹屋ホテル「虎の子渡し」をめぐる —



龍安寺の「虎の子渡し」は15個の石が14個にしか見えない謎の仕掛けで有名です。阿部はこの池庭にもこっそり同様の仕掛けを施したといわれています。

笹屋ホテルの敷地内には、近代の庭園には珍しい四角い池があります。そこに配された石は古くから「虎の子渡し」と呼ばれていますが、由来を記したものは何も残っておらず、口伝えのみ。長らく眠っていた当館の池庭の謎に迫ってみましょう。

「虎の子渡し」の謎

その池は、万松閣と豊年虫に挟まれた位置にあります。ロビーから見える庭の池とつながっていますが、部分的に方形（四角い形状）の「池庭」をなしています。水の中には石が点々と配置され、「虎の子渡し」という呼び方だけが伝えられています。

「虎の子の渡し」とは、母虎が子虎の命を守るため、知恵を働かせて川を渡ったという中国の説話で、一説には秘蔵のお金を「虎の子」と呼ぶ起源だとか。京都の世界遺産・龍安寺の石庭に並ぶ石が、いつからか「虎の子渡し」と呼ばれており、当館の池庭の石ともなんらかの縁があるのでは、と考えられてきました。

作庭した阿部貞著は何者か？

方形の池庭が造られたのは、万松閣のオープンに合わせた昭和39（1964）年。作庭者は阿部貞著。昭和7（1932）年の「豊年虫」の作庭に、設計者・遠藤新とともに関わり、庭と一体感のある風雅な別邸を生み出した人物です。

遠藤新はフランク・ロイド・ライトの高弟で、大正後期から昭和前期にかけ甲子園ホテル（現武庫川女子大学甲子園会館）をはじめ全国で名建築を手がけた建築家。阿部とは同郷の親友で、東京帝大でも懇意でした。阿部はその後長く当館の庭に関わり、昭和40年代まで自ら地下足袋姿で剪定を務めていました。

東京帝大時代、明治神宮外苑や京都御所などを手がけた日本の造園の第一人者・原熙に師事した阿部。庭園への知見は深く、京都の名園への見識も持っていたはず。万松閣の四角い敷地の造園を任され、連想した庭の中に龍安寺の石庭があったことも、容易に想像がつきます。

遊び心と敬意が息づく池庭

当館の敷地内には千曲川の伏流水が流れ、池を澄んだ水で満たしています。「方形の敷地と豊かな水を利用し、あの「虎の子渡し」を再現したら……」阿部はそんな遊び心を持ったのではないでしょう。川が舞台の説話を、よりリアルに再現できると見たのかもしれませんが。

龍安寺の石庭に並ぶ石は15個。当館の池庭は13個。龍安寺と同じ「1個見えない」仕掛けも施しました。月の名所・更級の地にちなみ、十五夜に少し欠ける十三夜に数を合わせて一歩引き、格式ある古利と昔の作庭者に敬意を表したようにも思われます。

昭和中期、二庭師として剪定に来た阿部老人が、仕事の合間に当館スタッフに「こりや虎の子渡しと言ってるね……」などと、語りかけている姿が見えるような思いにとらわれる池庭の風情です。



カウンターバーより